

特252

仕合せ

670

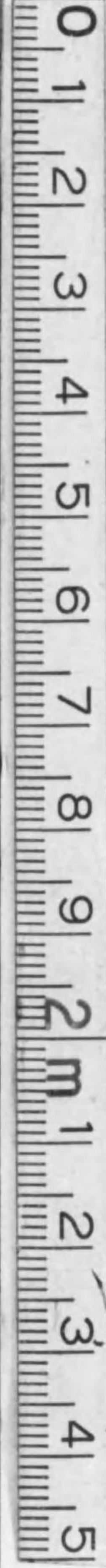
道

他力信心

と

自力更生

高橋正雄著



始



特252  
670.



仕合せへの道

—他力信心と自力更生—



著 雄 正 橋 高  
道 の へ せ 合 仕

生 更 力 自 と 心 信 力 他



市 路 姫  
刊 會 ね る か あ

北  
海  
道  
の  
道  
徳



## 仕合せへの道

—他力信心と自力更生—

高橋 正雄

今日は私に此席でお話をせよとの事ではありますが、私は自分の生活と云ふものを、割合樂に仕合せにする事が出来るやうにならせて貰うて居るのであります。それでその次第を申し上げて聞いて頂き度いと思ふのであります。私と致しましてそれより外に何もこれと云うて皆さんの前に立つて申し上げる程の事はないのであります。ところが今日の講演會に就きまして、何か題を定めて呉れと主催者の方から申されましたので、此處に掲げて貰ひましたやうに「他力信心と自力更生」と云ふ題を掲げて貰うたのであります。

私の申し上げ度いと思ひます事は、誠に平凡な事でありまして、少しもむつかしい事ではないのであります。併し乍ら題を掲げました以上は、題の心持を一寸初めに申し上げて置くのが順序かと存じます。

二

私の考へでは信心と云ふものは、自分が々々と自分の力ばかりを突つ張つてやつて居つたのが間違ひであつたと氣づかせられまして、自分々々と思つて居たこのものも、他力とでも云はずに居れないやうな恵みの力に生かされて生きて居るのであつたと氣づかせられた、その生活の調子、その調子の生き方を信心と云ふのであると思ふのであります。

自力々々と申しまして、私など自分で考へて見ますのに、この年になりますまで、自分の力でやつて來なかつた事はありませんので、その點から申しますれば、今日までの事凡て自力でやつて來たと云ふ事が出来るのであります。所がその自力の生活が私を仕合せにして呉れたか、他の人の爲めにもなつて來たかと申しまして、それは正反對でありまして、私を行き詰らせて

了つたのであります。その點から申しまして、自力々々と申しまして、甚だ怪しからぬ自力もありませんので、自力でやりさへすればよいか、自力を振ひ立たせさへすればよいかと云ふと、さうは行かないのであります。自力と申しまして、私を行き詰らせ、他には迷惑ばかり掛けて來たやうな自力は使はない方がよろしいので、そこに氣づかせられまして、自力を使ふ事を止めて了ひましたところに、そこに全くそれ迄とは別な生き方が始まつて來たのであります。それはこれ迄の力を自力と云ふ名で呼びますならば、他力とでも云はなければならぬ動きであります。しかし、それは私を通し、私に現はれて働くのでありまして、私を離れた力ではありませぬから、その點から申せば矢張り自力と云つてもよいのであります。けれどもそれは前の私を行き詰らせた力とは全く異つたものでありますから、それを自力と申しますなら、前のは我力とでも云はなければならぬのであります。

兎に角これまでいろ／＼とりきんだり、あせつたり、かうもして、あゝもしてと不安ばかり感じて居つた、それが皆自分の感違ひからさうなつて居つたのであると云ふ事に氣が付きまして、凡ゆる自分の迷ひが醒めて、そして日々かうしてやつて行けて居る、この自分の生き方と云ふも

4  
のが、これ迄考へて居つたやうなものではなかつた、自分の力みや掛引で生きられて居るのではなかつたと云ふ事に気が付く、そこで、かうやつて生きて居ります生活全體の調子と云ふものが、變つて來るのであります。それは生かされて生きるとでも云はなければならぬものでありまして、うそも無ければ掛引もなく、らくで難有い生き方になる、その生き方を信心と名付けたものであらうかと、私は思ふのであります。

三

さう云ふ信心の暮し方になつて参りますと、經濟の問題に惱んで居るとか、家庭に問題があるとか、心の縫れがどうともならないとか、仕事が面白く出來ないとか云ふやうな、吾々の生活の凡ゆる問題が不思議にだん／＼解けて参りまして、其處に生れ變つたやうな暮し方が出來て來るのであります。それが即ち更生と云ふ事であらうかと存じます。

そしてその更生した所の生活の仕振りを、自分が味はうて見ますと、そこに他の者を頼つたり、他のものをあてにしたり、さう云ふ依頼心を持つて、何處ぞからどうかして、呉れよばよいのに、

あの人があゝして呉れよばよいのに、それをして呉れないからどうもいかななどと云ふやうな事が、皆自分の考へ違ひであつたと云ふ事がわかつて來るのであります。そして總ての事が、この自分と云ふものを通して、生れ出て來る働きの一つに依つて、そこに湧き出て來るもので立行くのであると云ふ事が解つて來る、それが即ち自力更生と云ふものでありませう。

そこに至つて始めて自分の力と云ふものが、どんなにたいしたものであるかと云ふ事が解つて参りました、こんな事ではどうもならん、どうしようか知らんと云ふやうな氣がして、情ない世渡りしか出來なかつたものが、全く一變して自分と云ふものは、誠に難有いものである、たいしたものである、と云ふ事が解つて來て、どんな事に出會ひましたも、ぐらつく事はないと云ふやうになつて來ると云ふと、それは自力更生と云つて差支ないであります。

そしてさう云ふ「自力更生」と云ふ事がどこから出來て來るかと思つて、それは先に申しました他力の信心からさう云ふ生活が出來る事になつて來るのであります。

他力と云ひ、自力と云ひ、言葉の上からだけ申しましたら、全く反對のやうに聞えるのであります。自分の生き方の實際に就いて考へて見ますれば、他力信心即ち自力更生であり、自力更

生、それが即ち他力信心に依つて吾々の生活全體が生きてゐるとらくに出来る所から、更生も出来るのであります。

かやうに私は信じて居りますので、その心持をお話申して見度いと存じまして、こゝに「他力信心と自力更生」と云ふ題を掲げて頂いたのであります。

## 四

今日我が日本の内外の行き詰りを考へた上から、自力更生と云ふ事が喧しく唱へられて居るのでありますが、併しその自力更生と云ふ事が、唯自分の力みや、自分の我心を募るのに過ぎないやうな事になりましたのでは、行き詰りを打開するどころか、却て餘計に他に迷惑を掛けるやうな事になったり、自分では疲れたり、神経衰弱になったり、或は又自分はこれ程して居るのに他ものはそれ程やらんと云ふ不足になつたりして、ますます悪くなるばかりかも知れません。

そこでこの自力更生と云ふ事は、どうしても他力信心と云ふところから、動き出して來るのではありません。私には私自身の身の上の實際の有様

からこんなな思ひまするので、これが果してさうであるか、どうかと云ふ事は、皆様の教を蒙り度いと思ふのであります。それでこれから暫らくの間、御清聴を煩し度いと思ひますのは、さう云ふ大體の見當から申し上げて見度いと思ふのであります。

## 五

それで題の事はこれ位にしておきまして、暫らく題を離れてお話を進めて行つて見ようと思ふのであります。私は何時も申すのであります。この年になりますまで、この年と申しますのは、私は今年四十六歳になりますので、四十何年と云ふ長い間、唯の一日も忘れた事がないのは、なんであるかと申しますと、どうしたら私は仕合せになれるであらうかと云ふ事でありませぬ。

他の事は餘程本氣に思ひつめた事でも、暫らく時が経ちますと、熱がさめたやうに忘れてしまひ、なかく續かぬのであります。このどうしたら仕合せになれるであらうかと云ふ事は、唯の一日も忘れた事がないのであります。これは私ばかりではなく、恐らく皆さん、さうでありませ

う。口の上では私わたくしはもうどうなつてもよいと云いふ人がありますが、その實じつ、腹はらの中では、もう少しなんとかよい具合ぐあひになれるとよいと思おもふのに、それがならぬものですから、そんな言葉ことばも出でるのであります。人間にんげんとして、否いな生きて居ゐるものとしてこの世よに仕合しあせになりたいと思おもはないものは恐おそらくありはしますまい。私わたくしも四十何年たんなんと云いふ長い間かん、仕合しあせになり度たい、仕合しあせになり度たいと思おもひつめてやつて來たのでありますが、なか／＼思おもふやうに仕合しあせになれぬのであります。他の事ことは三、四年間ねんかんもやりますと、どんな事ことでも大分だいぶんやれるやうになるのであります。例たとへばこの席せきには御婦人方おにんがたも見えて居ゐりますが、御婦人方おにんがたが着物きものを縫ぬはれる事ことにしましても、何年なんねんか習ならはれると自由自在じゆうじざいに縫ぬへるやうになるのであります。どんな上手うまな人ひとでも、生なれた時から何なにも彼かも縫ぬへるのではない。私わたくし方かたの子供こどもなんか習ならうて居ゐるのを見みましても初はじめには雑巾ざつしんをさしたりして居ゐりました。それも針はりの筋すぢが曲まつたりして居ゐる。それが三年ねん経たち、五年ねん経たち、女學校じよがくかうにも行いくやうになりますと、もう一人ひとりで羽織はねおりでも、袴はかまでも結構けっこう縫ぬふのであります。その速はやさと云いつたら、私等わたくしらから見ると誠に驚おどろくべきものであります。何なにも毎日まいにち裁縫さいほうばかりして居ゐるわけではありませぬのに、五年ねんも七年ねんもやつて居ゐります間に、そんなに上手うまになるのであります。

## 六

それが仕合しあせになる事ことばかりは、何十年なんじゆんと云いふ長い間かん、一日いちにちも缺かかさず、その事ことばかり考考へて居ゐりますのに、一向かう仕合しあせになれぬと云いふのは、どう云いふわけであらうか、そこに一つ大おほに考考へて見みなければならぬ所ところがあると、かう私わたくしは考考へたのであります。何故なぜさう考考へたかと申ましますれば、もうその頃ころまで三十年さんじゆんもの間かん仕合しあせになり度たいと思おもうてやつて見みましたのに、一向かう仕合しあせになれませず、却かえて不仕合ふしあせのどん底どんぞこに陥おちつて了しまつたのであります。どんなになつたかと申ましますと、第一だいいち、お金かねに困こまりました。家賃やちんに心配しんぱいし、米代こめだいに心配しんぱいし、日々にちごとの小遣こづかいにも困こまる。金々かねかねと金かねの事ことを思おもはない日ひがない。次つぎには日々にちごとしなければならぬ仕事しごとが、どうもいやで面白おもしろくない。なるとだけし度たくない。と云いつてしないわけに行いかぬ。しやう事ことなしにさせられる。まるで瘦やせ馬うまが無暗矢鱈むあんやたらに鞭むちで叩たたかれるやうなものであります。

今いま一つ當時たうじ私わたくしの困こまりました事ことは、みんなとの間柄まがらひが好よくなかつた事ことであります。親子おやこ、夫婦ふうふの間に波風なみかぜの絶たえ間まがなく、なんとなく隔へだてがあつて、どうも素直すなはちに打ち解とける事ことが出来できない。



お互に腹のどん底から解け合つて暮すと云ふ事が出来ない。そんな有様でありますから、全くやり切れない気がし、不仕合せな日々を送つて居つたのであります。

そこで毎日面白くない心持で暮して居りますから、神経衰弱になり、身體は弱くなつて、眼計り光ると云ふやうな事になつて了つたのであります。

そこでこんなに仕合せになり度いと一生懸命やつて居るのに、仕合せになれないのは、何故であらうかと云ふ事を、本氣に考へざるを得ない事になつたのであります。そしてそこから私は初めて教と云ふものが、私を助けて呉れるものであると云ふ事が解つて來たのであります。その次第を明かにして見度いと思ひまして、私はお話させて貰つたり、本に書いて見たりして居るのであります。それから私は自分の考へ方が根本から間違つて居つたから、何十年やつても仕合せになれぬのだと云ふ事を解らせられたのであります。

## 七

それは例へて申しますれば、旅行をするのに、方角を取り違へて歩いて居るやうなものであり

まして、この姫路より神戸へ行き度いと思ふのに、岡山の方へ行くやうな事をして居つたのであります。仕合せになり度いと思つて居り乍ら、毎日やつて居る事はと云へば、不仕合せになるやうな事ばかりやつて居る。そしてそれが自身の間違ひであると云ふ所に氣がつかない。方角を取り違へて居ては、歩けば歩く程遠くなるばかりで、いつ迄経つても目的地へ着ける筈がありません。方角さへ間違つて居なかつたら、いくらぼつ／＼歩いて居ても、いつかは到着する事が出来る。これは例へて云うたのでありますが、それを實際の生活で申しますと、方角を取り違へて居ると云ふのは、どう云ふ事であるかと申しますと、此處に幸ひ塗板がありますから、これに書いてお話させて貰ひませう。



を描く

私は仕合せと云ふのは、繪に描くとこんな、まんまるいものではないかと存じます。何一つ

不足のない状態であります。

次に不仕合せと云ふのはどんなに描くかと申しますと、



こんな描いたらどうかと思ふのです。何故かと申しますと、不仕合せな人は、私を初めとして、きつと何かの不足を云ふのであります。私など身に覚えがあるものですから、人様にお會ひしましても、この方は仕合せな方であるか、どうかと云ふ事が凡そわかる氣がします。不仕合せな人は、きつと何か知ら不足を云はれる。親の不足を云ふか、配偶者の不足を云ふか、世の不足、運勢の不足、時には神佛の不足までも云はれる。何故そんな不足を云はれるのかと云ふと、その方御自身に足りないものがあるからであります。何もかも十分にありましたら、不足を云はれる筈がない。足らぬと云ふのは繪に描くとこんな(塗板を指し)穴のあいたやうに描

かねばなるまいと思ふのです。

私(わたくし)が不仕合せな時分、始終足らぬ〜と思つて居つたのはお金であります。金が足らぬ〜と、そればかり思つて居りました。(塗板を指し)この一方の穴は金が足らぬ穴であります。



では金が足らぬだけであるかと申しますと、今一つ足らぬものがあります。それは、なんであるかと申しますと、親切(しんせつ)が足らぬのであります。



親切が足らぬと云ふのは、自分が他人に親切をするのが足らぬと云ふのではなく、他人が親切にして呉れるのが足らぬと云ふ不足でありまして、友達の親切にして呉れ方が足りない、家内が親切にして呉れぬ、あの人が親切にして呉れぬと云つて、不足にばかり思ひ、何故みんな私に親切にして呉れぬのだらう、人間と云ふものは、なんと云ふ薄情なものだらうと云つて、不足ばかり云うて居つたのであります。

## 八

それで一方には金が足らぬ。一方には親切が足らぬ。両方に穴が開いて居りますから、(塗板に向つて真中の細くなつて居る處を指し)こんなに真中が細うなる。それで心細かつた。(笑聲起る)不合せと云ふ事は、一口に申しますれば、心細いと云ふ事でありませう。かうして繪に描いて見ると、よう解ります。金も無い。誰れも親切にはして呉れぬ。両方から穴が開いて来て、それがだん／＼深うなると、真中が細うなるから、心細くて仕方がない。いよ／＼穴が深うなると、ちぎれて了ふかも知れませぬ。さうなると生きて居れないやうになる。夫婦などもまだ喧嘩をして

居る間はよい方で、いよ／＼穴が深うなつて、切れて離縁になつて了つたら、もう喧嘩も出来ないうやうになりませう。夜逃げをするとか、自殺をするとか云ふのも、皆切れて了つたので、私は三十前後にちやうどこれ位に(塗板の繪を指し)なつたのであります。

そしてその頃どう考へて居つたかと申しますと、三十前後まで毎日考へて居りました事は、どうしてもこの穴を埋めなければならぬ、不足の穴を埋めて心細うない事にならなければならぬと考へまして、どんな事をして居つたかと申しますと、ちよつと分別はよかつたのです。お金でも、親切でもみんなから貰つて来て、そして私の足りないところを埋めようと思つたのです。これはよい分別に相違ありません。何處ぞに金も親切も有り餘る程澤山に持つて居る人があつて私の不足の穴を埋めて呉れるなら、これ位勝手のよい事はありません。私はそれを三十前後まで根氣よく探したのであります。

ではさうしてやつた結果、次第に穴が埋つて、だん／＼仕合せになり、心強うにもなつたかと申しますと、反對に次第に不合せになり、心細うなるばかりでありました。

そこで私はどうしてこんな事になるのであらうかと考へて見たのでありますが、どうしても

自分ではそのわけが解らなかつたのであります。所が教と云ふものがそこにありまして、私にそのところをはつきりとわからせて呉れたのであります。教がどう云ふ事をわからせて呉れたかと申しますと、教と云ふものは私に「他のものはあてにならぬ」と云ふ事を知らせて呉れたのであります。

## 九

教の云うて呉れる事はいろ／＼ありまして、うそを云ふなとか、腹を立てるなとか、いろ／＼ありますが、教の眼目は他のものはあてにならぬと云ふ事、そこをわからせて呉れるのであります。弘法大師様は、いろは四十八文字を歌にして居られますが、あれがお釋迦様の教を平易に説かれたものださうで、あの中の「我が世誰ぞ常ならむ」と云ふのは、私は佛教の事は一向知らぬのであります。なんでも無常と云ふ事を説かれたもので、何一つあてになる確なものはないと云ふ事ださうであります。そんな事をちよつと聞くと、大層心細い話のやうに聞えますけれども、實はさうではなく、あてにならぬと云ふのが眞理であり、眞相であつて、その事がはつき

りと解らぬものだから、日々の生活が皆間違つて行くことになる。そこで何年やつても仕合せになれぬのだと、かう云ふ事をわからせようとするのが教の眞意だと云ふのであります。

「他のものはあてにならぬ。」この教が私の腹のどん底にこたへたのです。何故かと申しますと、三十年と云ふ長い間、私は他のものをあてにばかりして來たのであります。家内をあてにし、友達をあてにし、世間をあてにし、みんなからどうにかして貰うて、自分が仕合せにならうと思ひ、それをして呉れぬと、私がかんがひ込んで居るのがわからぬのか、なんと云ふ人間と云ふものは、みんな薄情なものだらう、社會は無慈悲なものだと四方八方に不足を云うて居たのであります。つまり「この私をどうにかして今少し仕合せにして呉れ」と云つて周囲のみんなに無理ばかり云つて居たのであります。それを何十年と云ふ長い間やつて見たのであります。誰れもどうともして呉れぬのであります。そこでわれ乍ら困つて了ひまして、どうする事も出来なくなり、行き詰つて了つて居りますところへ、教が「他のものはあてにならぬ」と云ふ事を知らせて呉れましたので、私にして見ますれば、三十年間、他のものをあてにして來て、一つもあてにならない事を思ひ知らされて居たのでありますから、私の腹の中によろ解りまして、そ

れから気がついて見ますと、成程他のものがあてになる筈がないのであります。どうしてかと申しますと、私がこんなに（塗板を指し）大穴を開けて居る。



他の者も私と同じ様に矢張り、（塗板に向いて）こんな穴を開けてゐるのであります。かうして繪に描いて見ますと直ぐに解ります。先方にも、金も親切も足らぬ〜と云つて、誰れか呉れる者はないかと、そればかり探して居るのであります。それをこちらの穴を埋めて呉れと申しましたところで、おいそれと埋めて呉れる筈がありません。わかり切つた話であります。ところが私は只それだけの事を三十一の年になる迄、気がつかなくつたのです。なんと云ふ愚か者でありませう。

大正十二年關東大震災の折、あの震災は日本の心臓を打ち碎いたやうなものでありますので、時の内閣から陛下に奏請し奉つて、所謂精神作興の御詔書を下し賜はりました、その中に本氣になつてやらねば、これ迄榮えて來た我國が潰れる心配があると云ふやうな恐れ入つた御言葉を下されたのであります。あの時私もあちらこちらでそれにお話をせよと云はれました。その時私はお話をするに就て申したのです。話をした位の事で人間が本氣になれるものならわけのない事で、私自身にしまして、小學校に始めて上つた時から、中學校、東京の學校とどれ位よい話は聞かされたか解りませんが、それが一つも自身について居ない、わがものになつて居ない。うそを云ふなと云ふやうな事は、私は何千遍聞かされたか分りませんが、それでも矢張りそれを云ふ事が止められなかつた。腹を立てるなと云ふ事も、幾ら云ひ聞かせられたか分りませぬのに、矢張腹が立て仕方がない。只話を聞いた位で、人間が改れるものとは私には思はれません。

ではどうしてうそが止められぬのか、腹が立つのか、そのもとをよう調べて見ますと、みな私に不足があり、穴が開いて居るものですから、それでうそも云ひ、腹も立つのです。少しも不足のない者に五圓やるから腹を立て、見よと云うたとて、不足のないものは腹が立たぬのです。

一一

うそを云ふ事を、私は面白い云ひ方だと思ひますが、掛引を云ふと申します。掛引引つ張る、なんでもあの人間の持つて居るよいものを引き寄せて、自分のものにし度い、當りまへの事を云うて居たのでは出来ないから、うそを云うて目的を達しようとする。ちやうど針の先に餌を付けて針でないやうに見せかけて、魚を釣るのと同じ事をするのであります。では何故そんな浅ましい事をするのかと申しますと、つまりこちらの穴を埋めようと思つてする事なので、こちらに穴が開いて居なかつたら、誰れが好き好んでそんな浅ましい事を致しませう。

又人を憎むと云ふのも同じ事でありまして、矢張不足と云ふものが形を變へて、憎みになつて居るのであります、親子喧嘩も、夫婦喧嘩も、皆そこから起つて居るのであります。して見ま

すと、あの不足の穴さへ埋める事が出来まして、不足のない人間に自分になる事が出来たら、夫婦喧嘩も、親子喧嘩も起るわけがなく、教訓などは要らない事になり、なんにも云ふ必要がない事になります。

これは私が私の心の働き工合を調べて見まして、自分がさうなものですから、他の人も同じやうなわけで苦しんで居られるのではないかと存じまして、その大震災の後に、各地で話をせよくと云はれますので、私は唯二時間ばかりの間の話でも、話す私も、聴いて下さる方も、無駄な事に時間を費してはならぬ、少しでも役に立つようになければならぬ、私の考へでは只話をしたり、聴いたりしたゞけでは、人間と云ふものは、どうともなれるものではないと思ひますから、先決問題として、皆さんに不足があるか、ないかを打開けて頂いて、御相談して見度いと存じます、それで不足のない方は失禮ですが、手を上げて見て下さいと申しまして、震災の翌年、大正十三年の三月、各地での講演會の時に、無遠慮にお尋ねして見たのであります。

皆さんの中で金に不自由の無い方がおありですか、親切を他の人からして貰ひ度いと思ふのに、して呉れないと云ふ不足を少しも思はない方がおありですか、ありましたら手を上げて見て下さ

いと頼んで見ました。

一一一

大正十三年の三月には、私は広島縣、岡山縣、兵庫縣、この近くでは城崎地方に行き、それから香川縣、愛媛縣、この五縣下あちらこちらに参り、三十日間平均毎日二百人位、總數六千人程の方にお話させて貰つたのでありますが、なんとその六千人の中に、「私はみんなが親切にして呉れて、少しも不足がない、金も十分に有つて、なんの不自由もない、本當に不足と云ふ事がない、穴は一つも開いて居らぬ」と云ふ人は、たつた二人しか無かつたのであります。

一人は兵庫縣のこの奥の竹野と云ふ所の婦人會で、その晩はちやうど雪が降つて居りましたが、會場であつた小學校に行つて見ますと、五六百人の方が集まつて居られました。そこで私は一つも不足のない方は手を上げて下さいと申しましたら、一人の御婦人がさつと手を上げて、

「私は金に不自由もなく、親切に不足もありません」

と云はれました。他の方は何ともお答へがない。

それから今一人は広島縣のある島で、座談會をして居りました時、今度は男子の方で、

「私は不自由も、不足も御座いません。そんなに世の中に不足な人が多いのでしたら、これは僅で御座いますが、此處に少しお金がありますから、これで誰れかの穴を埋めて上げて下さい」

と、云つてお金入れをその儘私に出されました。中を開けて見ましたら、五圓紙幣一枚と一錢銅貨三枚入つて居りました。

六千人の中で二人は不足がないと云はれたのですが、あとの五千九百何人と云ふものは、私と同じやうに穴が開いて居ると云はれる。

そこで私は考へたのです。世の中がむつかしい筈ぢや。三千人不足があつて三千人餘つて居るなら、ちやうどよいのですが、餘つて居ると云はれるのはたつた二人しかなく、他の五千何人と云ふものは、みんな足らぬと云つて居るのでありますから、そこにも問題、こゝにも問題と云ふ事になるのは當り前であります。

一一三

ちやうどその頃の事でありました。備後のある町で、私の話を聞いて下さったお方の中に、こんな云はれる方がありました。

「私の親類に夫婦喧嘩ばかりして居る者があります。氷屋で主人は五十位、家内は四十位で、子共が無い。財産は何萬圓かあるのですが、三年程前から喧嘩ばかりして居る。もう判れるより外は無からうと云ふので財産も分け、戸籍上の手続をするばかりになつて居る。どうか一度その家へ行つて夫婦に話をして聞かせて呉れませんか」

と云はれるのです。私は、

「先方から聞くと云はれぬのに、話すと云ふ事は私は好まぬのですが……」  
と申しましたら、

「それでは二人の云ひ分を聞いて見てやつて下さう」

と云はれますから、兎も角もと云つてその家へ行つて見ました。

行つて見ますと二階の座敷に大きな机を置いて、夫婦に親類の人も二三人来て居られる。約束の通り私はお二人のお話を聞きませうと申しましたが、どちらも一向話し出されぬ。みんな

の前では云ひ難いのでせうから、一人づゝ別々に聞いてやつて下さいと云はれるので、では奥さんの方から聞きませうと云つて、下の座敷で二人だけになりましたら、今までと打つて變つて、云はれるく。一時間半程泣きく話されました。それが皆御主人に對する不足なのです。しまひには涙も乾いてしまひました。そして、

「まあこれ位にしておきませう」

と云はれますから、

「未だありますか」

と申しましたら、

「何んぼでもあります」

と云はれる。(笑聲起る)

そこで私は、



「奥さん、今聞いたあなたのお話を繪に描いて見ませう。半紙と硯を貸して下さう」と云つて、こんな繪を描きました。(塗板に向ふ。)



「これは何ですか。」

「これはあなたの繪です。今あなたが一時間半程云はれましたのは、みな御主人がかうもして下さればよいのにして下さらぬ。あゝもして下さればよいのに、それをして下さらぬ、と云ふ不足ばかりでしたね。不足と云ふのは足らぬと云ふ事ですから、繪に描くと、あなたの腹の中はかうなりませうが」

と申しましたら、

「さう承ればその通りです」

と得心されました。

それから二階へ上りまして、今度は主人に向いて、

「あなたの云ひ分はどうです」

と申しますと、

「どうもかうもありやしません。まるでなつて居らんです」

と云はれますから、

「それは誰の事ですか」

と申しますと、

「うちのやつがです」

と云はれる。三年間の事をたつた二た口で云はれました。

「それでは、今下で奥さんの繪を描いたのですが、御主人のも、描いて見ませうか」と云つて、今度は半紙に(塗板に向ひ)



かう云ふ大穴の開いてゐる繪を描いたのです。すると主人が、

「どうしてですか」

と不思議さうに問はれますので、

「今あなたの云はれたあの二た口の言葉を私が聞きますと、あれは家内がやさしくして呉れ、ばよいのに、かうもして呉れ、ばよいのに、あゝもして呉れ、ばよいのにと、三年間不足に思はれた事が、たつた二た口の言葉になつて出たので、つまり不平不足があなたにあるからです。不足と云ふ事は穴が開いてゐる所があると云ふ事で、つまり足らぬのでありますから、繪に描くとこんなになるのです」

と申しますと、主人も仕方なく、

「繪に描かれちゃ、どうもならんなあ」

と云はれますから、

「それはあなたに勝手の悪い繪になつたから、さう思はれるのでせう。何も私は故意にこんな繪を描いたのではないのですよ。あなたが奥さんに親切にしてやり度い、やさしくしてやり度いと云はれるのであれば、そのやうな繪を直ぐ描いて上げますけれども、あなたの實際がさうでないぢやないですか。私は只實物の通りを描いたので、何もわざと悪く描いたわけではないのですよ」

と申しましたら、

「さう云はれ、ばさうぢや」

と云つて承認せられました。

そこで私は下の座敷で待つて居られる御家内を上に呼んで、二人揃うた所で机の上に繪を二

つ並べて、

「よく御覽なさい。(塗板に向ひ)これが奥さんの繪です。こちらが御主人の繪です。よく御覽なさい。先方も穴を開けて居るのですよ。向ふもよいものが無いのです。向ふにも無いのに、それを呉れ〜と云つて、幾らやかましく云つて見た所で、うちのあく筈はないのです。あなた方の喧嘩は五年でも七年でも止む事はありますまい。あなた方お二人は喧嘩より他にやる事はありますまい。御親類の方は、私に仲裁をして呉れと云はれるのですが、仲裁と云ふ字は「仲から裁つ」と書いてあり、こゝに一つしかよいものがない、それを二人が私のもちや、いや私のもちやと云ふから喧嘩になつて居る、そこで仲裁して、それを眞中から二つに切つて、こちらがお前の分、こちらがお前の分とちやんと分ける、それで喧嘩をする事はあるまいと云ふのが仲裁であります。ところがあなた方の間は、私が仲裁をしようにも、切つて分けるものが何もないのです。どちらも大穴が開いて居る。どうしてこれが仲裁出来ませう。私は御免蒙りませう」

と云つて歸りました。そして驛の方へ出掛けました所が、主人の方がなんと感ぜられたか、後

を追うて來られた。そして汽車の時間を待つ間、プラットホームで私は申しました。

「あなたも不足も不平もおありでせうけれど、奥さんの方もあの通り満たされないのでお氣の毒な心持で居られるのですから、あなたの方から少しでもやさしい心、いたはる心を奥さんに出して上げて下さい」

と云つて置いて、私は汽車に乗つて歸りました。

一六

大正十三年の夏は大層暑かつたのでありますが、私とその夏のある暑い日に、その町から船に乗らうと思つて、その家の前を通りますと、今にも別れるとまで云つて居られたその夫婦が、主人は氷を衝でかけて居り、御家内は帳場に坐つて帳面をつけて居られるので、「今日は」と云つて寄りました所、

「どなたかと思へばあなたですか」

と云ふ。私は冗談に、

「矢張りやつて居りますか」

と申しましたら、

「何をですか」

と聞かれますから、

「あなた方は喧嘩より他にすることはない筈ですが」

と申しますと、

「喧嘩はあれ切り止めました。(笑聲起る)」

と云はれる。

「どうして止めたのですか。」

「あの繪を見てから、喧嘩をするのが阿呆らしうなりました。(笑聲起る)」

私わたくしがその二人から教へられた事は、喧嘩けんわと云ふものは、阿呆あほうらしうなつたら出来できない。餘程よほど本氣ほんきでなくては喧嘩けんわは出来るものではないと云ふ事ことであります。今も私わたくしはそれを一つ話はなしにするのであります。

教おしに依よつて「他の者ものはあてにならない」と云ふ事に氣きづかせられますと、夫婦ふうふ仲なつが好よくなる位の事ことはなんでもない事ことであります。私わたくしの話はなしを聞いて下くだされてそれから夫婦ふうふ仲なつが好よくなつたと云いつて下くださる方かたは、だん／＼あるのですが、今いまから十何年なんねん前まへ、長崎ながさきでお話はなしさせて貰もらつた時とき、六十幾むそいくつになる人ひとが「初めて本當ほんたうの夫婦ふうふらしい夫婦ふうふになる事ことが出来た。改めて結婚けっこんをしなければならぬやうな氣きがする。今迄いままでのは本當ほんたうの夫婦ふうふではなかつた。あなたのお話はなしを聞いてから、こんなになつたのだから、云いはゞあなたは仲人なかつとみたいなのだから、新婚旅行しんこんりょこうに温泉嶽うんせんだけのつゝじ見物けんぶつに行いき度たいと思おもふから、一緒いっしょに行いつて呉くれぬか」と云いうて來こられた事ことがありました。わさ／＼長崎ながさきまでよう行いきませんからお断りことわりして手紙てがみを出だした事ことがあります。

それなどが先づ初めて、それからだん／＼方々はうはうで仲なつが好ようなつた／＼と云いうて呉くれられる人ひとが多おほくなり、去年せうねんの三月おほさきに大阪おほさかでさう云いふ人達ひとたちが集あつまられて、私わたくし等ら夫婦ふうふにも來こいと云いはれて参まゐりました。なんでも七組ななぐみか八組やちぐみか夫婦ふうふ仲なつの好ようなつた人ひと々が集あつまられました。そんなにしてこ

の「他のものはあてにならぬ」と云ふ事がわかりましたれば、家庭問題の纏れなどは直ぐに解けるのであります。

こんな事は實になんでもない、わかり切つた事で、繪にでも書きましたら、まるで子供だましのやうな阿呆らしいやうな事ではありますが、實際上では如何にも適切な事なのであります。

## 一八

私自身わたくし自身の身の上みの上がその通りになつて居るのです。三十前後までは夫婦の仲も、親子の仲も悪く、どうしたら好くなるものか、見當さへつかなくなつたのですが、それが教のおかげで、只今では、どうしてこんなに好いのであらうかと思ふ程、好くなつて来て居るのであります。夫婦の仲が好いと云ふ事になると、その他の事はどんな苦しい事でも辛い事でも、なんの事もなく、堪へて行く事が出来るものであります。この頃の不景氣にしましても、食べ物たべものが少くても、着物きものが乏しくて、却てそれが二人の仲の味ひになり、仲の好くなる助けになる位のものであります。

そこで私わたくしは夫婦の仲を現はす特別算術とくべつさんじゆつを考へつきました。一と一を加へると四、十と十を加

へると二十と云ふのが普通の算術さんじゆつであります。私の申します特別算術とくべつさんじゆつは、人情にんじやうの計算けいさんをするのに使ふので、金かねや品物しなものの勘定かんだいに使ふと間違ひが起ります。

假かに主人しゆじんに十の力ちからがあると致いたします。それから奥さんおくさんの方ほうにも十の力ちからがあるとしまして、夫婦の仲ななが好い時には、この奥さんおくさんの十の力ちからが、主人しゆじんの十の力ちからに加はつて二十の力ちからになる。仲ななが悪いと主人しゆじんの十の力ちからで奥さんおくさんの十の力ちからを叩たたき壊こわして了しまつて零ぜろになる。仲ななが好かつたら二十になるべき力が、仲ななが悪かつたら零ぜろになる。これでも仲ななの好いのと悪いのとは大變な違ひです。しかしこれは普通の算術さんじゆつの勘定かんだいであります。十と十を加へると二十になる。十から十を引くと零ぜろになる。これは尋常じんじやう一年生いちねんせいでも知つて居る普通の算術さんじゆつで、私の云ふ人情にんじやうを計算けいさんする特別算術とくべつさんじゆつは、そんなものではないのです。

それは十と十を加へると四十になる。十から十を引くとマイナス二十になると云ふのです。なんとをかしい計算けいさんではありませんか。それがどうしてさう云ふ事になるのかと申しますと、夫婦の仲ななが好い時は、主人しゆじんが外そとに出て働く場合に、内うちの家内かたいが私わたくしを信じて呉くれて居る、私わたくしを大切に思おもうて呉くれて居る、留守くせうはよく守つて、無駄な事むだなことはしない、子供こどもは立派りっぺいに教育けいよくして呉くれ、お

げで内の家庭はだん／＼よくなつて行く。こんなに奥さんを腹の底から信ずる事が出来る。そこで主人の十の力に奥さんの十の力が所謂蔭身に付き添ふ事になり、何をしてもよい具合に出来て、二十の力に働くのです。

ところがそれは留守をして居る奥さんの方でも同じ事で、主人が私を信じて呉れて居る、私を心の底から愛して下さる、そしてよく働いて下さる、私はどんな苦勞をしても辛いとは思はない、誠に難有い事だと云ふ事になり、奥さん自身の十の力に主人の十の力が加はつて、二十の働きが出来るのであります。仲が好いと主人の方も奥さんの方もどちらも二十の力になる。そしてその二人の力が一緒になるのですから、そこで四十になるのです。もとは主人も奥さんも十づゝの力であるものが、仲が好い爲めに合せて四十になるのでありますから、人情を計算する特別算術と私が云ふのであります。

これは親子の間でも、友人間でも、皆さん覚えがおありでせう。一人ではやり難い仕事でも、二人仲好く腹を合せてやると云ふと、何倍とも知れぬ力が出て来るものです。何事に限らず、相談相手があるのと無いのではまるで意氣込みが違ふ。「おい、かうしようと思ふが、どうだらう」と云つて相談を掛けると、「そりやよからう、やらう」とかう云つて呉れる者があると、そこに大變な元氣も出、力も出るものであります。この講演會なんかでも、皆さんが力を合せてやつて居られるから、こんなによい工合にやつて行けるのであります。これは何も不思議はないので、それを不思議な事のやうに思ふのは、この人情の算術を知らずして、普通の算術で計算して居るからであります。

## 一九

これは仲の好い方ですが、悪い方はどうなるかと申しますと、十から十を引いて零になるだけでは濟まぬのです。今度は叩き壊しになるのです。「私が外に出て、こんなに辛棒して働いた所で、家内は内で何をして居るかも分らぬ、歸つてあいつの顔を見るのもいやぢや」と云ふやうな事になり、自棄を起して、内へ歸つて喰べれば金もかゝらず、内にも喜ぶのに、外で酒を飲んだり、道樂をしたりして、次第に信用を落し、仕事は出来ずして、金は使ふと云ふやうな事になる。そこで主人の力は零になる上に穴をあける事になる。

奥さんの方もさうなると、主人が外で我儘ばかりして居るのに、自分だけ内で眞面目にやつて居つたつてつまらないと云ふもので、主人に秘密で借銭して贅澤な着物を買つたり、つまらぬ遊びに耽つたりする。そこで奥さんの十の力も零になつて了ひ、その上に穴をあける事になる。そこで唯零になるだけでは濟まない。云はゞマイナス二十と云ふ事になるのであります。

## 二〇

かう云ふ事は世間に幾らもある事でありまして、一人々々を見ると、御主人も立派な人であり、奥さんも賢い方で、誠に申分のない人だと思ふのに、どう云ふものか、家の運勢がよくないと云ふやうな事がある。さうかと思ひますと、一人々々見ると、失禮ながらそんなに賢さうに見えないのに、家庭の調子は誠によく、家運も繁昌し、子供も出来がよいと云ふやうな夫婦がよくあるものであります。

こんなのは普通の勘定では不思議な事と思はれないでありませうが、私の申す人情を計算する特別算術では、さうなるのが當り前でありまして、つまり一方は夫婦仲が悪いものですか、賢いのが却て大きな穴をあける結果になり、一方は仲が好いものですから、お互の力が倍にも三倍にもなり、それが一緒に加へられるので、大變な力となつて働くのであります。

## 二一

かやうに申して参りますと、どうしても家庭は和合しなければならぬのですが、どうしたら不和がなほるものかと申しますと、そこに道があるのであります。その道はなんであるかと申しますと、教に依つて「他のものはあてにならぬ」と云ふ事を徹底的に知る事でありませう。先方も穴をあけて居るのであるからあてにならぬと云ふ事が、腹のどん底から分ると云ふ事でありませう。

その事を私は教のおかげで思ひ知らされました爲めに、家内をあてにし、こちらのあてにして居た通りにして呉れないと不足に思うてばかり居たのは、私が間違つて居つたのだと云ふ事が分つたのであります。それ迄は家内からして貰ふ事ばかりをあてにして、私は外で働いて歸るのぢやから、やさしくして迎へて呉れるだらう、お風呂も沸かして呉れて居るだらう、御馳走

もこしらへて待つて居るであらうと云ふやうな事をあてにして歸る、それが一つでもはづれると、直ぐ不足を云ふのです。留守に何をして居つたんだ、私が外で辛棒して働いて居るのが解らんのかと云つた調子です。

所が家内の方ではどう思うて居るか云ふと、今日はどんな土産があるだらうか、さぞ留守は御苦労だつたとやさしい言葉もかけて下さるだらうと云ふやうな事をあてにして居る。そこでこちらのあてがはづれるのです。あてにしたのがこちらの間違ひなのです。私は教に依つて氣づかせられましてから、十五、六年この方、一つも他のものをあてにしません。あてにする考へが起りまして、それは私の間違ひだと云ふ事を直ぐに思ふのです。それでだん／＼夫婦の仲でも、親子の仲でも、又友人との仲でも好くなつて來たやうに思はれるのです。

そんなにあてにしない事になると、夫婦の仲などは、水臭い事になりはしないかとよく云はれる方がありますが、あてにして居ないとあてがはづれる事がないから、不足に思ふ事が少しもないので。そしてほんの少しばかりの事をして呉れても、あてにして居ないのに、ようして呉れると思ふと難有い事だと云ふ氣がするのです。水臭いどころではありません。留守にはどんな事

があつたかも知れぬ、子供が病氣して、それで家内は心配して居るかも知れない、お湯どころか、御馳走どころか、こちらが歸つてなんでもしてやらねばと云ふやうな心構へで歸つて來さへすれば、どんな事があつても、腹も立たねば、不足も起きる事はありません。そしてほんのちよつと「お歸りなさい」と云うて呉れただけでも、あてにしないのによつて呉れる事よと、それが本當に喜べるのです。こんなよい家内とは思はなかつたのにと云ふ事にもなる。(笑聲起る)こんな事は實になんでもない事で、こんな僅な事で家庭が好うなつて行くとは不思議なやうですが、やつて見ると實に明かな事なのであります。

三三

私は、今洋服を着て居りますが、この洋服に就て話があるのです。この洋服は尾道の友人が洋服に關係のある商賣をして居るので、私に呉れたのであります。私がこれを貰うたわけを聞いて頂く前に、一人から物を貰ふ、貰はぬと云ふ事に就ての私の考へを聞いて頂かなければなりません。以前には私は人が物をやらうと云つて下されば、直ぐに喜んで貰つて居つたの



です。やらうと云はれぬものでも欲しがつて居つたのです。所が御教に依つてだん／＼氣づかせられて参りましたからは、人からやらうと云はれましても、筋が立たないと無暗に貰はないのです。私がこの洋服を貰うたわけをお話する前に、やらうと云はれるのを貰はなかつた話を一つ致しませう。

それは七、八年前の事でありました。大阪で一、二ヶ所お話をして、それから紀州の和歌山へ参つた事があります。所が大阪から三十五、六位の御婦人が尋ねて來られまして、しみ／＼とお禮を云はれるのです。それは大體かうなのです。

「この間からの大阪でのお話を聞かせて貰ひまして、私は大變に助かりました。今朝私方で子供が泣き出したのですが、これ迄でありますと子供が泣いたりすると私の方もいら／＼して剣突を食はして居つたのですが、この間からのお話を聞いて居りましたから、今朝はいや／＼あんなに娘が泣くのは、娘の方に大穴が開いて居るのだから、私の方から先づ娘の不平をなだめてやるだけの親切をしてやらなければならぬと云ふ氣になりました、私は泣いて居る娘の側に行きまして、お母さんに悪い所があつたらおこらへよ、さあ髣を結うて上げましよう」と云つて、

親切にしてやりましたら、その子供が直ぐに泣く事を止めまして、素直になりましたのです。これ迄はなか／＼さう行かないで一しきり親子でいがみ合つたものです。それが今朝は教のおかげで誠によい具合に行きましたので、娘等を學校に送り出しておいてから、その話を主人に致しました所が、主人が申しますのには、お前はよい所に氣が付きかけた。今日もう一度和歌山にお話を聞きに行つてお禮も云うて來るがよいと申しまして、電車賃も出して呉れ、若し遅くなつたら宿に泊つて來てもよいと云つて呉れましたから、お禮かた／＼お話を聞きに参りました」とかう云はれるのです。

二三

これは實に嬉しいお話を聞かせて貰うたと私も喜びまして、お晝のお話を致しまして、お話ですみまして二階の座敷に上つて居りますと、その御婦人が今度は泣き／＼頼まれるのか、訴へられるのか、一寸わからない様なお話をせられますので、どうしたのですかとだん／＼聞いて見ますと、「私は只今のお話が身に泌みてこたへました」

と云はれるのです。話のどこがそんなにあなたにこたへたのですかと聞いて見ますと、私がこんな話をしたのがこたへたと云はれるのです。

それは私は前にはよくうそを云つて居りましたが、近頃は餘りうそを云はないやうになりました。うそを云ふのは氣持のよい事ではないので、云ひ度い事はないのだが、みんながうそを云ふのに、自分ばかりうそを云はないと、私が損が行くとかう思うて、よくうそを云つて居つたのです。所が實際にやつて見ると、うそを云ふのはなか／＼むづかしい事で、うそを云はない方が餘程らくなのです。何故かと云ふと、うそを云ふとその云うたうそを一つ／＼覚えて居らねばならぬのです。若しうっかり本當の事を云ふと、前のがうそだつたと云ふ事がばれる。そこで仕舞には澤山覚えて居なければならぬ事になる。私の頭位では、七つや八つは覚えて居られるが、二十も三十もは覚えられない。それで結局うそは續かぬので、たうとう弱つて了ひました。私もこれ迄随分根氣よくうそを云つて來ましたが、つまるところ皆はげて了ひまして、只私がうそつきぢやと云ふ悪い評判だけが残つたのであります。それで近頃はうそを云はない事になりましたら、頭の中に覚えて居る事は一つも要らるのであります。それで頭の中が軽うなりました。

こんな事を私が話しましたが、その奥さんにはこたへたと云はれるのです。どうしてですかと聞いて見ますと、その方は主人に秘密に毎日の賣上金の中から十錢取り、二十錢取りして、貯金して居たと云ふのは、主人と年が違ふ上に、子供は貰ひ子で頼りになるやらならぬやら分らぬので心細うてならぬ。そこで金なりと貯めて置かねば老先が案ぜられると云ふので、毎日取つて貯金して居つた。初めの間は三圓五圓と貯まつて行くのが嬉しかつたが、毎日やるのだから殖える一方で、百圓にもなつたら少々氣味が悪くなり、だん／＼殖えて行つて今では三百四十圓程の金になつた。所がさうなると氣味が悪くて仕方がない。あれが主人に知れはすまいか、留守に見はしまいかと思ひ出すと、芝居を見に行つて居ても、花見に行つても、安心して見て居る事が出来ない。さうなると、もう主人は知つて居るのではあるまいかと云ふ氣もしたりして、一緒に寝て居てもなんだか主人の様な氣がせず、刑事巡査が側に寝て居る様に思はれる。(笑聲起る)かう云はれるのです。

私はそれを聞いた時、お金と云ふものは恐ろしいものだと思ひました。金が集まる程よい事はない筈ですが、それを集めるのに道を以てしないと、その集まつた金が祟る。少しも役に立た

ないばかりでなく崇る。實に恐ろしいものだと思ひました。

## 二四

それでその御婦人は私に頼まれるのです。どうか後生ですから、その金をあなたが何かよい事に使つて了うて下さらぬか、あなたなら何かよい事に使ひ道が御座いませう、お願ひしますと云つてその三百四十圓のお金を私にやらうと云はれるのです。

さう云ふ時以前の私でしたら直ぐに貰ふのですが……。その金は私が貰つて上げればその御婦人が助かると云はれ、誰れにも云はれない事は分り切つて居るのですからねえ。所が今日の私はさう云ふお金はなんぼにも手が出ませんのです。その三百四十圓は、その人が心細いものだから、その穴を埋めようと思つて無理をして貯めたお金なのです。その金が無しになつたら猶その婦人は心細い氣がするに相違ないのです。

そんなお金を貰ふと、一寸こちらが助かるやうに思はれますが、助かる所ではなく、崇られるのです。そこが今の私には分るものですから、私は元談半分に申したのです。

「奥さん、そのお金は私は、よう貰ひませんよ。」

「どうしてですか。」

「まあ、よく考へて見て下さい。私が貰うて上げたら、あなたの方はさつぱりとして助かれるかも知れませんが、私の方が助かりません。そんなお金を貰うて歸りましたら家内がどう云ふでせうか。何處でそのお金は貰はれたのですか。」これは大阪のある御婦人から……。「それはどう云ふわけがあつてですか。何かわけのないのにそんなお金を呉れはしますまいと云ふでせう。(笑聲起る)」

そんなに云はれるのが面倒なと思つて、家内に秘密にしておく、今度はあなたと同じ様な苦勞を私がせねばならぬ事になるでせう。あれを家内が見やせんか。もう知つて居るのではあるまいか。一緒に寝て居つても、女探偵が側に寝て居るやうな氣がするでせう。(笑聲起る)だから私はそのお金はよう貰ひません」

と申しましたところ、その御婦人は、ぶる／＼震い出して、

「どうしませうか」

と云はれます。そこで私は申したのです。

「どうしませうかと云はれよば、私は御相談に乗りませう。まあよくそのお金の次第を考へて見て下さい。元來お金と云ふものは生きたものでありまして、扱ふに道を以てしませんと崇めるのです。あなたはそのお金に崇られておいでなのです。そのお金はあなたの金ではないではありませんか。御主人のお金、尠くとも御主人とあなたとお二人の金ですよ。それを御主人に黙つてあなたの手許へ引ッ張り寄せて居られるのですから、その金が落付かぬのですよ。隣の犬を勝手に連れて来てつないで置けば、その犬が自分方のものになりませうか。隣の家へ歸り度いと云つて夜通し泣き叫ぶでせう。それと同じ事ですよ。そこで私に相談をせられるなら、其の金は早速歸つて御主人の前にお出しなさい。眞に相濟まぬ事をして居りました、私はこのお金をあなたに黙つて取つて居りました、私をどの様になりともして下さい」と云つて、その金を御主人の前にお出しになるのがあなたの道でせう」

と私は申したのです。

これは私にわれ乍らよう云うたと思ふのです。私の力で云へたのなら、自慢をしてもよい

所ですが……、(笑聲起る)全く教のおかげでそこを解らせて貰うたのでありますから、少しも私の力ではないのであります。そして私は猶一言その奥さんに云うて上げる事が出来たのです。それは、

「あなたがそのお金を御主人の前に出されたら、御主人は「私は今日迄お前を家内ちやとばかり思つて居つたが、家内では無うて泥棒であつたのか、泥棒は今日限り吾家に居つて貰はぬ」と云はれるかも知れませんが。さう云はれて行く所が無かつたら、私の所へおいでなさい。出来るだけの事はさせて貰ひませう」

と申しておきました。以前の私でありましたら、お金の方は貰ふけれども、金を持たない人間は相手にしなかつたのですが、今の私は生きて居る人間は粗末にならんと云ふ事を知らされ、金でも正しい道に依つてのものでしたら、一錢でも拜んで頂くけれども、道にはづれたものは恐ろしいと云ふ事を教へられて居るのであります。

その翌日私が和歌山から難波の驛に着きますと、その御婦人が改札口の所に立つて居られて、私の顔を見るなり涙を出しながら云はれますのに、

「昨晚あれから歸りましたら、もう一時を過ぎて居りました。家に歸る時は雪が降つて居りましたが、雪に濡れ／＼着物が惜しいとも、雪が冷たいとも思ひませんでした。そして家に歸ると、主人がやすんで居りましたので、今朝起きるなり、通帳と判とを出して、主人にお詫びを致しましたら、主人はどう云はれるかと思ひましたら、「お前がそこに氣がついて呉れたら云ふ事はない。今三百四十圓の金が無ければ店がどうと云ふのでないから、そのお金はお前に上げるから持つて居つたらよからう」と云つて呉れました」

と云つて私にお禮を云はれるのであります。主人はよい人ですね。しつかりしたよく出来た人ですね。それからその家庭は温かになつて、その上主人から銘仙の羽織と着物とを買つて貰つたと云ふ手紙も来たのであります。三百四十圓貰つてその上に褒美まで貰つて……。その時は冗談も云へなかつたのですが、御主人から改めて貰ひましたと云はれた時、それからなら私に下されたら貰ひませうかと云つて見ようかとちよつと心の中で思ひました。(笑聲起る)そ

れは私に云はなかつたのですが、向ふももう呉れる必要はないのです。(笑聲起る)

これは私の自慢話で御座いますが、そんな次第で私はやらうと云はれても、貰はない事もあるのですが、この洋服は私は貰うたのであります。

## 二六

それはどうして貰つたかと申しますと、その人は不足の穴が少しまつてこぶが出来掛つたと云はれるのであります。不足の穴の開いてゐる人からでしたら貰はんのですけれども……。その方は七、八年前からの知合ひなのですが、三年程経ちました時、實に面白い事を云はれました。それは尾道に洋服商の組合が出来て居て、その忘年会がありました時、後に三人か四人残つての話に、何の話からか、一人の人がこんな事を云ひ出した。

「こゝにこれだけ残つたが、これから家に歸つて、ようお歸りなさいましたと家内から云うて貰へる者が誰かあるかね」

と云ひますと、みんな吾々仲間に家内からそんなに云うて貰はれるものが誰かがあらうにと云

うた。所が私の友人はそれを聞いて思ふのに、「は、あ、みんなよう云うて貰うて居ないわい。自分はおかげで近頃家内からお歸りなさいと云つて貰へるやうになつて居る」と。

そこでみんなに云うた。

「云うて貰ひ度いのか」と。

「それは云うて呉れ、ば悪い氣持はすまいぜ」

と云ふ。

「では教へてやらうか。きつと云つて貰はれる分別があるのぢやが。」

「あれば云うて見い。」

「云うて見いぢや云はぬ。教へて呉れと云へば教へてやる。」

「では教へて呉れ。」

本氣でも無さうだがさう云うた、そこで教へてやつたと云ふのです。

「なんでもない事ぢや、これから歸つてやつて御覽。こちらから先に只今歸りましたと云ふのぢや。するときつとお歸りなさいと云ふに相違ない」と。

するとみんなが口を描へて、「そりや云はうぜ」と云ひますので、

「それは云はうぜと云ふが、では諸君はこちらから云はずに、先方から云うて貰はうと思つて居るのか。そんな事がどうして出来るか。さう云ふ僕も實は二、三年前迄、君等と同じ考であつたが、或る人の話を聞いてから、それは自分の考が間違つて居たと云ふ事が分り、亭主であらうが、何であらうが、自分がよそから歸つて來たら、家内に今歸つたと挨拶するのが當り前で、それを自分の方からは何も云はずに先方から先に云はせようと思ふのは、どうして云はせる積りなのか。家内が若し一生懸命に仕事でもして居たら、主人が歸つた事に氣がつかぬぢやないか。それを向ふから挨拶させようとは、どうしてさせるのぢや。仕事をして居る家内の前へ行つて立ちでもするのか。そんな馬鹿氣た事をするよりも、こちらから「おい、今歸つたぞ」と云つたらどうなら。實は僕もさう云ふ氣になつてから、何時とは無しに家庭が温かになり、らくになつたよ」

と話してやりましたと云つて聞かされた事がありました。

なんでもその友人も以前には、店の仕事も餘り自分はしないで、店の者任せになり勝ちで、自分は誰や釣りが好きな方であつたので、自然經營もよい工合に行かなかつたらしいのですが、氣持がかはつて、自分から進んでやり出したら、何時とはなしに仕事の方は緊張する、みんなの機嫌はなほると云ふやうな事になり、「私の方は景氣の好かつた時よりも、今日不景氣になつてからの方が、却て全體として店の經營がらくになりました」と云つて喜んで居られるのであります。さう云ふ人が私に洋服を拵へてやらうと云はれるのです。そこで私は洋服そのものも難有いけれども、それと共にその友人のさう云ふ改まつた生活の喜びが嬉しくて、なんだか難有いものを着て居るやうな氣がして、それが大變心持がよいのであります。

人から物を貰ふと云ふ事は嬉しい事に相違はありませんが、それにしても先方が何の不平も不足もない生活になられて、その中から生れ出て来たものを下さると云ふ事でありましたら、これ位難有い事はないのであります。私はそのやうなものでしたら、心から喜んで頂くのであります。

す。

こんな實話に就て自力更生とはどんな事かと云ふ事を考へて見ますと、今の大阪の奥さんの事で申しますれば、主人に死なれたら心細いからと云ふもので、黙つて店の金を取つて貯金して居たと云ふ、その力も自力と云へば自力でありますが、そんな自力は自分を行き詰らせて了ふ自力であります。又尾道の友人にしましても、自分は主人であるから頭は下げない、店の者を使うて、自分が遊ぶのは當り前だと考へて居た、それも自力と云へば自力ですが、その自力は怪しい自力であつて、自分を更生せしめる所か、却て不仕合せにして居たのであります。それが教に依つて氣づかせられて、自分が間違つて居たと云ふ事がわかり、そこに新に醒めたところの自力、大阪の奥さんの場合では、主人の前に通帳を出してお詫びをするると云ふ、その働きをさせる所の自力、尾道の友人で云へば、歸つて来た時、自分の方から今歸つたと云ふ挨拶をする力、それが出て来るところから、全く更生とでも云ふべき程の仕合せになられたのであります。それが本當の

自力でありませう。さう云ふ自力が出て参りませんと、あらゆる行詰りを打開し、一切の問題を解決して行く事は出来ないであります。この深刻なる不景氣、この艱難なる國歩、これを大丈夫乗り切つて行くと云ふたいした力と云ふものが、みんなの中から湧き出て来なくてはならないのでありますが、さう云ふ力が無いのであれば、どうするわけにも行きませんが、出せば出るのですから出さなくてはなりませんまい。

## 二九

今から七、八年前、私は愛媛縣のある學校でお話をした事がありました。その話を聞いて下さつた一人の呉服屋さんが（後にわかつたのですが）二萬二千圓程の借銭が出来て、死なうにも死なれず、生きて行かうにも行けぬ。子供が十人もあり、しかもその二萬二千圓の借銭と云ふのが、親類の娘さんの嫁入りの支度金やお婆さんの膾縷金まで借て使つて居るのでありますから、どうも人情の上からも、義理の上からも、どうもならぬのです。どうしようか／＼と悩みぬいて居る時に、學校で、兩方から穴が開いて心細い、誰れか此の穴を埋めて呉れるものはないかと探

し歩いて、みんな穴をあけて居るものばかりで、誰れも埋めて呉れる筈がないと云ふ話を聞いたので、この人は私の事を知つて云つて居るのかと思つた、そして誰れもこの穴を埋めて呉れるものはないと定まれば、出来ても出来ないでも私 がやるより外はないと覺悟が坐つたと云ふのです。

そしてその大借銭のある中で、僅ばかりの品物を持つて、朝起きると何里かの道を歩いて賣りに出掛る、そして夜遅く歸つて来る、雪が降らうが、雨が降らうが、やつて／＼やりぬいたと云ふのであります。二萬二千圓の借銭がある上に、子供が多い。信用は落ちて了つて居る。少々品物を持つて賣つて見た所でどうならう。考へて居つたら、いける筈がない。何にもする氣になれぬ。自分の考へから云うたら、元氣も張も出ようわけがないのですが、さう云ふ迷ひ心を突き破つて、もう一つ底から湧き出て来る處の力が猛然とその人に出て来たのであります。

それは只自分の力みや一時の元氣でない、云はゞ天理を貫いて生き通して居る力が、自分を通して動き出したとも云はなければならぬ事になつたのです。だからそれが本當の自力であつて、同時に或は又他力と云つてもよい所のもので、つまりこれ迄の自分とは全く異つたものにな



つて働き出したのです。

さうなるともう他のものをあてにする考へ、依頼心などは微塵も無くなつて了ひ、誰れにどうして貰はうとも思はない事になつて、只自分でやつて／＼やりぬくより他はないと云ふ事になつたのです。つまり本當の自力ですな。

三〇

ところがさうなるとえらいもので、いつとはなしに家族の考へも變つて来て、これ迄はあなたが失敗したからと云つて不足ばかり云つて居つた細君が禰掛けで、他家の洗濯物など引受けて出した。さうなると娘もお父さんやお母さんがあんなに働いて居られるのに、私もこんなにして居てはすまぬと云つて働き出す。息子は商業學校を中途に止めさせたのが、それが兵隊に行つて、朝鮮の聯隊で第一の成績で賞め者になり、除隊後はあちらの會社から「お前のところの息子を使つてやらう」と云つて来て呉れる。商業學校を卒業して居る者でも口が無くて困つて居る今日、途中で止めたものを向ふから特に雇うて呉れると云ふやうな事になり、さうなると世間の信

用もだん／＼恢復して来て、あそこには此頃一生懸命やつて居る、あゝ云ふ所のを借て居て拂はないのは悪かつたと云つて、だん／＼これ迄拂うて貰はれなかつた掛けを拂うて呉れるやうになり、三年も経たぬ間に一萬五六千圓の借金を拂ふ事が出来たと云ふのであります。

なんと不思議な事が起きて来るもので、さうなると後の六、七千圓の借金も全部拂へる見込が立つ事になり、どうなる事かと思はれた一家が立ち直つたと云ふ事でありませう。ちよつと聞くと不思議に思はれるのですが、よく聞いて見ると、ちやんと筋が立つて居るので、少しも不思議な事はないのであります。

三一

その上にその人は云つて居られました。おかげで私の方は前よりも家庭が圓滿になりました、それだけは借金のあつたおかげであります。この頃では近所の人や親類の者が、夫婦仲の悪い者はおそこへ相談に行けと云つて勤めるらしいので、五六軒夫婦仲を好うして上げました。私方の事をありの儘に話すだけで、内もその通りだと云つて喜ばれるのですと話して居られました。

その上今一つ私はその話を聞いてその人に云うたのですが、そこには借銭で娘の嫁入支度を  
して居る。それは本人にも、気がつかずに居たのですが、私が話して上げてほんにその通りぢ  
やと云ふ事になつたのです。

それはどう云ふ事かと申しますと、その娘さんは借銭が出来た爲めに、お父さんやお母さん  
の苦勞して居られるのを見て、自分も働くやうになつたと云ふのでせう、そこを私が云ふので  
す。普通嫁入り支度と云へば、箆箆長持洗濯鹽迄拵へて持つて行くのですが、本當の支度と云  
ふものは人間の腹の中にしつかりとした用意をする事を支度と云ふので、お腹がたよりなくて、  
ペコ／＼して居ては、他の物が幾ら揃うて居ても支度がよいとは云へない。よく田舎道に御支度  
所と書いて出して居る所がありますね。あれは御飯をおあがりなさいと云ふ事でお腹を拵へてお  
いでなさいと云ふ事なのでしょう。嫁入支度もそれと同じ事で、本人の腹の中にしつかりとした  
力が出来て居ないと支度が出来たと云ふ事は出来ません。ところがその娘さんは借銭にびく  
ともしない支度が出来たのです。お嫁に行つて先方に借銭があつてもびくともするものでない。  
借銭があれば却て夫婦仲が好くなりますよ、私の両親がさうでしたと云つて、ます／＼本氣に

なるでせう。借銭があつては面白くないなど、云つて逃げて歸るやうな事はしません。これが  
本當の嫁入支度ではありませんまいか、と話したのであります。

こんなにして教に依つてこれ迄の自分の間違ひに気がつき、本當の自力が出る事になり、信心  
の動きにまでなつて参りますと、借銭があつても、内輪がごたつて居ても、凡てそれを建て直  
して、經濟問題も、人情問題も、皆内からそれを解決して來るのであります。

## 三二

今一つ同じやうな話でありますけれども、して見ませう。これも矢張り愛媛縣のある所での事  
であります。まだ郡役所がある時分でしたが、その郡内の教育會で話をせよと云ふ事でさせて  
貰ひまして、その夜は郡内のある村の役場の二階で話をせよと云はれまして、参りました。所が  
二階に一抔の人でした。そしてその夜はそこへ泊り、翌朝は九時から二里ばかりある所の學校で  
また話せよとの事で、其處へ行かうと思つて居りますと、馬車屋さんが來て、私に自分の馬車  
に乗つて行けと云ふのです。私は難有うと云つて乗りました所、その馬車屋さんが私に話し

かけますのに、

「昨夜、役場の二階に多勢聞く人が見えましたらうがな。」

「多勢見えましたな。」

「あれは私が村中にふれて歩いたからあんなに多勢来たのですよ。」

そこで私は一寸不思議な気がしたので。馬車屋さんが自慢をするのどうか。妙な事を云ふと思ひましたが、なほ私は聞いて見ました。

「近頃は講演會なんか云ふと、人は来ない。浪花節とか活動寫真とか云へば多勢来るけれど、講演會と云ふと、何處でも人が集まらないので困るのですが、あなたはどうか云つてふれたのですかと尋ねて見ましたら、馬車屋さんはかう云ふのです。

「私はかう云つて村中ふれ歩いたのです。『今度来る人の話を聞いたら、一年間にきつと百圓づつ儲かるから聞きに来なさい』と云うてふれて歩きました」と云ふのです。

### 三三

これには私も驚きました。私も近頃は種々な評判をせられますが、さう云ふ金目を以つて私のお話の値打をいれられたのはそれが初めてであります。

「だが百圓儲かると云うたらうそにしてもまあ行つて見てやれと云つて多勢見えたのでせうが、しかしそれでは一年経つた時に苦情が出はしませんか。あれから一年経つたが、百圓儲からぬが、どうして呉れるかと云うて……。」

すると馬車屋さんの云ふ事が振つてゐるのです。

「そりや困らんです。去年の八月あなたが女學校でお話なさつた、あのお話を聞いてから、私はまるで自分の毎日の暮しの仕振りが變つたのです。私はこの馬車一臺をかうして乗り廻して、この郡内をあちらこちらして、お客を乗せて、それで渡世をして居るのでありますが、實は去年お話を聞く迄は、お金は欲しいのですが、馬の尻を叩いてお客を拾うて歩くのは辛いので、仕事はなるだけし度うない。毎日大儀々々して居たのです。そこで晩にはその苦勞を忘れる爲めに、どうしても一杯飲まぬと納らないのです。それも二三合飲まんと……、さうすると經濟は兎角左前になりまして、家内の機嫌が悪いのです。さうなるとます／＼仕事面白くない。毎日

不愉快で弱つて居つたのです。ところが女學校でのあなたのお話が私の急所にあたつたのです。それから私の氣が變つた。私の腹にヒシ、ヒシ、こたえたのです。ほんにさうぢやと思ひました。それから馬の尻を叩いて、馬車をかうして使ひますのに、それが不思議に面白うなつて来ました。そこで自然お客さんにも親切になり、どうぞと云つて、どんな人にも機嫌よく出来るやうになり、私も一日愉快に働けますので、強いて澤山飲みませんでも氣持よく酔ふのです。さうなると家内も親切にして呉れ、内輪もいつとはなしに好うなりまして、經濟向も勘定して見ますと、不思議な事には、あれから九、十、十一、十二、一、二と六ヶ月間に、ちよつと五十圓程残つたのです。それがあなたのお話を聞いたからなので、六ヶ月に五十圓ですから、一年には百圓でせうが。ですから今度のお話を村中の人に聞いて貰ひ度いと思ひまして、當り前の事を云つたのでは、なか／＼聞きに來ないから、それで今度の講演を聞いたら、一年中に百圓づゝ儲かると云つてふれたのです。ですからもし百圓儲からぬがどうして呉れると云うて來た人がありましたら、あなたはあのお話をどう聞きましたか。私のやうにやつて御覽なさい。一年に百圓の金はやすく／＼残ると云つてやる積りです。」

これは實に嬉しい話で、私も感心させられたのですが、その馬車に今一人隅の方に乗つて居る人がありまして、その人がまた話し出すのです。それは、

「馬車屋さんの云ふのは本當ですよ。私はあの女學校のお話で生命が助かつたのです。あの時、私は行き詰つてしまつて居たのです。私は實は日傭取をして居るのですが、近頃は不景氣で何處にも使つて呉れないのです。それで毎日ぶら／＼遊んで居りまして、こんな事をして居たら、自殺をするか、夜逃げでもするより外はないと思つて居たのです。所が女學校で講演があるから聞きに行かんかと誘つて呉れる人があつたのです。その時私の思ひました事が講演なんか聞いたつて、腹の足しになりはすまいし、聞いても聞かんでも云ふ事はわかつて居る。悪い事はすな、善い事をせよと云ふのだらう、かう思ひましたけれども、氣晴らしになつてもよい、聴かないでも、様子を見にだけでも行つてやれと云ふ氣で出掛けたのです。さう云ふ積りですから、後ろの方に坐つて居る連中の顔ばかり見まはし、あの男も來て居るな、あの男もと云ふやうに見廻して

居りました所が、だん／＼あなたのお話が何時とはなしに耳に入り出して、なんだか私の事を云はれて居る気がし出したのです。そして半分過ぎからは本気で聞かずに居れないやうになり、たうとうしまひにはあなたはひどい事を云はれた。よく仕事がないと云ふけれども、仕事と云ふものは其處らになんぼでもある、他所の田圃の草を採つてもよし、其處らあたりの草を刈りてもよいと云はれた。私は腹の中で思うた。そんな事をして居たつて、食べられないではないかと思つて居たら、あなたは續けて二日や三日食べないでも死にはせぬ、二、三日さうしてどこの仕事でもして見て、それで食べられなかつたら私の所へ來なさい、と云はれた。そこまで聞いた時には、私はあなたの顔をにらんで居た。よしやつてやる。そして道が立たななら行つてやる、覺えて居れと云ふ氣で歸つた。

## 三五

そして録を一挺腰にさして、夏の炎天に他所の家の田の畦の草を刈つて肥料に持つて行つて上げたり、牛の飼料にして上げたりしました。所が本當にあなたの云はれた通り、二、三日しまし

たら、前に仕事をさせて下さいと云つて頼んだ時には、仕事はないと斷られた家から、そんなにする位なら、うちへ來てせんかと云うて呉れるやうになり、難有うと云つてやつて居りますと、時分が來たら御飯を食べよと云うて呉れるのです。そしてその晩が來ると、これは今日の日當ちやと云うて金を呉れるちやありませんか。さうして毎日その要領でやつて居りましたら、それから今日迄ちやうど六ヶ月になります、一日も仕事がないと云ふ事がなく、今年の正月は近年に

なく、お米を二斗も持つてよいお正月を致しました。とかう云ふ話なのです。私はそれを聞きまして、難有かつたのですね。この二人が聞いて下されただけでも話をしに來た甲斐があつたと云ふ氣がしました。

## 三六

私は今はかうして皆さんにお話を聞いて戴くやうな事になつて居りますが、今から十五、六年前には、職は放れ、家は出て了ひ、無一物の着のみ着のまゝで、草採りもすれば、荷物運びもしました。さうして只自分の出来るだけの事をさせて貰はうと思ふばかりでやつて來たのであり

ますが、今日十六年経ちまして、矢張り財産も無ければ、一定の職もないから、定まつた収入もなく、道具もなければ資本もない、この身一つの人間であります。しかしそれでこの十六年間は結構不自由なしにやつて來られました。家族もろ共にです。これから先の事は云へませんが、この十六年間の事は正直に云へるのであります。

それで『金が無いからどうもならん、人が助けて呉れぬからつまらん』と云はれる人があります。すなわち、私は金は無うても出来る事をなさつたらどうです』と云うて上げる。さうすると、よく「する仕事がない」と云はれる。「あつたらなさいますか」と私は云ふ。

私は生れる時に金を持って生れて來たのではない。無一物の眞つ裸で出て來たのだから、金は無いのがあたりまへ。而も生れた時にはどうであつた。無一物の上に西も東も知らぬ。ものも云へぬ。唯乳を吸ふ事と尿尿する事、寝る事、泣く事、呼吸する事、その他には何も知らない。それで居て無一物の眞つ裸で出て來る。なんと云ふ元氣な事せう。景氣が好いやら、悪いやら知りもせず、夜やら晝やら、それも見ずに、兎に角出ると云つて飛び出して來た、あの勢ひと云ふものは、實にたいしたものではありませんか。

古來何千萬億と云ふ人間が生れて來たのですが、死ぬ時には六文か、七文か三途の川の渡し賃だとして持つて行くらしいが、生れる時には一文の金も持つて生れて來たと云ふ事は出来ません。何やら握つて居るなと思つて指を伸ばして見ると、空氣を握つて居る。さうして無一物で出て來たものが、かう云ふ公會堂でも建てる、道路もこしらへる。こんな電氣でも發明するではありませんか。

材料は皆天地のものを使ふのですが、それをこんなよいものに仕上げるのは、みんなこの人間と云ふものゝ内に具つて居る力の働きではありませんか。そしてこれだけの文明を建設して來たのであります。實にこの自分と云ふものゝ中から湧き出るものにどれ位の力があるものかと云ふ事は、自分でも分らないのであります。百萬圓持つて居る、千萬圓持つて居ると云へば、大變な物持ちのやうに聞えますが、實は全くの無一物でもこの自分と云ふものを持つて居る以上、たいしたものを持つて居るのであると云ふ事を忘れてはならぬのであります。

飯を食べる時に、茶碗も箸も無ければ、手でつまんでも食べるでせう。それだつたら仕事の方も手がある以上、金が無いとて、道具が無いとて、手一つで出来る事からしたらよいではないですか。私は十六年間、この手を使ひこの足を使ひ、この口を使うて居りますが、使ひきれないのであります。この私の中からでもどれ位のもが現はれ出るか、私はそこに無限の楽しみを覚えて居るのであります。花も咲かせ、實も結ばせてどれ程でもやつて／＼やりぬいて見ようと思ふのであります。

これは私力みや私の思ひつきからではないのです。教のおかげで私と云ふものが、他の人を頼つたり、うそを云うたり、掛引をしたり、慾な事をたくらんだりして居たのが、凡て大間違ひであつたと云ふ事を知らせて貰ひまして、そんな事を一切止めて了ひましたら、その後自然に湧き出て来たのであります。自分を通して働く力でありますから、自力と云つてもよいのですが、前の自力とは全然異つたものであります。又同時に他力信心と云つてもよいものゝやうに思はれるのであります。(拍手)自分がやつて居り乍ら、自分がして居るやうな気がしないのです。ですから、私が出した／＼と云つて振り廻す事もないのです。功を誇る事もなく、恩に

着せる事もなく、われ乍らかる／＼と働けて疲れる事もあまりなく、自然能率は擧るのです。そして又無理にする事もないのですから、疲れ／＼ば休むし、らかな心持で仕事をすることが出来、自分に割當てられる事はどこまでも避けず、ごまかさず、進んでやつて行けるのであります。

## 三八

かう云ふ動き方にならせられましたから、私は前に困りぬいて居りました事が、殆んど凡て解決し、仕事はらくに出来るやうになり、生活問題の不安はどこへやら無くなつて了ひまして、この人生と云ふものを無限の味ひを以て進めて行く事が出来るやうになり、夫婦の間、親子の間、友人の間にその味を味ふ事のよさと云ふものが限りない氣がするのであります。私はかう云ふよい事がこの天地の間にあらうとは思ひも掛けなかつたのであります。これでこそ生れてよかつたと云ふ氣もしますし、又いつ死んでも思ひ残す事もない氣がするのであります。そしてこんな仕合せを私に知らせて呉れた教と云ふものに對しまして、幾ら感謝しても感謝しきれない氣がするのであります。

今晚は皆さんがこんなに多勢おいで下さいまして、最後まで御熱心にお聞き下さいました事を  
 厚く御禮申し上げます。  
 これで私のお話は終りと致します。

(昭和七年九月四日、姫路公會堂にて  
 姫路あかるね會主催講演筆記)

昭和七年十二月廿五日印刷納本 (仕合せへの道)  
 昭和八年一月八日第一刷發行 定價金貳拾錢  
 (送料四錢)

版 権  
 所 有

著 者 岡山縣瀬口郡金光町四八〇番地 高 橋 正 雄  
 發 行 者 姫路市八代前番七九二番地ノ五 黒 川 久 成  
 印 刷 者 東京市豊島區巢鴨七丁目一六八八番地 森 本 直 次 郎

發 行 所 姫路市主路町 あかるね會  
 取 次 所 東京豊島區巢鴨七丁目 篠 山 書 房

電話 東京三三七一  
 三九番



◇ 高橋正雄先生著書目録 ◇

信者	金光教祖と新生活	断片語	こゑ	ぬすみなき世界	道についで	良いもの <small>(第三、四巻)</small>	をしへ	吾を救へるもの	おかげ	救われを救ふ	家庭問題座談	村上清子夫人
定價	一、〇〇	絶版	絶版	三〇	一五	第一編別版各編 八	五	五	五	五	二〇	一〇
送料	二	〇	〇	二	二	各編 二	二	二	二	二	二	二

◇ 高橋正雄先生著書目録 ◇

道を求めて	私の願	素談	座談	對話	ひとりごと	生のよろこび	一筋のよもぎ	神に語る	無よ	にひ	人生の	人
定價	一、八〇	一、二〇	一、二〇	一、〇〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、〇〇	一、五〇	一、二〇
送料	一〇	八	八	八	〇	八	八	八	八	八	〇	八

# 高橋正雄先生

月刊個人雜誌

## 生

天地の底から天地を貫いて生きる力、その力に生かされて生きる生活、感謝の生活、創造の生活は、先生の生活に於いて味ひ得られる。

凡そ人生の救ひは、良き門をたゞくにある。身を以て覺者に觸れ、その生活を味ふより外に道はない。本誌は毎號、先生の尊き生活記録であつて、その深刻なる體驗に基く講演の筆記、鋭き觀察と徹底せる反省とより生れ出づる隨筆と詩、水の如き消き身邊の消息は、迷へる者には道を、病める者には慰安を、弱き者には力を、而して生きんとする者には、光と熱と濕氣とを至れり盡せりに與ふる福音である。眞摯に道を求むる人々が、全身を提けて、本誌を清讀されん事を切に乞うて止まない。

### 誌代

一ヶ月 貳拾錢 (郵税共)  
六ヶ月 壹圓貳拾錢 (郵税共)  
一ヶ年 貳圓四拾錢 (郵税共)

東京 市宮 外下 篠山書房 振替 口座 東京 三番

終

